

# 教宣 せぶん

## 歴史をつくろう

阪神・淡路大震災から今日で12年が経ちます。被災された地域みなさんにとっては、この12年間にさまざまな「想い」があると思います。その胸には多くのものが去来すると思います。

被災直後に行なわれた支部臨時大会では、大阪分会の堀さんが撮影した被災状況を写したビデオが流され、臨時大会会場はあらためて大きな衝撃が走ったと聞きました。私は大会には行っていませんでしたが、当時の分会代表者が持ち帰ってきたこのビデオを、春闘のA集会で目にし、同じ仕事をする仲間の、手作りの、外勤社員としての視点で写したその映像に、テレビや新聞などで報じられるものとは違う生々しさを感じたのを覚えています。復興など不可能ではないかと思ったのを記憶しています。月日が流れ、多くの方の力と不屈の精神で、いまでは「街」は被災前とほとんど同じ状態にまで「回復」したと報じられていますが、人間のたくましさ、強さを感じずにはいられません。まさに「歴史が生まれた」ということだと思えます。

私たちの組織でも、被災以後、この1月17日には関西の仲間を中心に、必ず「記念行事」が開催されています。あの惨事を風化させず、そこから復興してきた自分たちの力や精神力をたたえ、仲間を思い、さらに手を取り合ってがんばっていこうという気持ちを新たにさせる趣旨で行なわれています。まさに労働組合の精神です。この「1月17日」に当時の組合員全員が「思い」をリセットさせれば、組合分裂など起こらなかったはずです。財産問題など起こらなかったはずです。何が大切なのか、労働組合とはどういうものなのか、言葉で表現するよりも確かなものを、私たちは自らの心に刻んでいたはずでした。

今日、あらためて「1月17日」に立ち返ろうとしている企業がどれだけあるのでしょうか。どれだけの労働組合が「記念行事」を開こうとしているのでしょうか。そしてどれだけの「部外者」が「当事者」の苦労や努力に思いを馳せているのでしょうか。12年経ったいまでも、あの日を忘れないようにしようとしている存在こそが「本物」だと思います。組合分裂で自らが「体制派」に回っていたとしたら、このような本物の存在になれたか甚だ疑問です。こういう感情がこみ上げてきたか甚だ疑問です。無勢派となり、虐げられ、しかし長いものに巻かれず立ち上がってきたからこそ、弱者や被災された人たちの「感情」や、這い上がってきた人たちの「姿」を忘れなかったのだと思います。私たちは、企業合併を通し、組合財産を奪われ、組合差別を受け、地位確認訴訟をたたかっています。まさにいばらの道です。しかし、そのおかげで人間として最も大切な「感性」を失わずにすみしました。この「感性」を持ってさえすれば、必ず「歴史は生まれる」と確信します。